



▲齋藤良太郎(さいとう りょうたろう)51歳。2011年に広告業界から転身して公益財団法人全日本ボウリング協会に入局。事務局長を経て2015年7月から専務理事。ダイエットのため始めたボディメイクは、マスターズチャンピオンになるなど趣味の域を超えている

新春インタビュー——齋藤良太郎 JBC 専務理事に聞く

JBCからJB(JAPAN BOWLING)へ名称変更 「2024年は変革の年に…」

今年4月の新年度から、公益財団法人全日本ボウリング協会は、公益財団法人JAPAN BOWLINGへ、略称もJBCからJBへと変更する。創立から使い続けてきた団体名を変える意図はどこにあるのか、ボウラー団体として今後目指す方向性などを、齋藤良太郎専務理事に伺った。

ウリングの普及のためには、何が必要とお考えですか。

近年はどの競技もそうですが、世界で活躍しなければ注目してもらえないのが現実です。ボウリングでも、スター選手、世界で活躍できる選手の育成というのが、いちばんの課題です。またメディアに取り上げてもらうには、選手が活躍することがいちばんですが、人と人のつながりも大事だと思います。今ボウリング界とメディアのパイプが細くなっていると思うので、それは業界全体で考えていかなければならない問題だと思います。

団体の枠を超えて最強メンバーで世界に…

——2021年から競技者規程を改定して、JBCの会員のままプロライセンスの取得が可能になるなど、プロとの垣根が低くなりました。

選手ファーストと言いますか、選手が出たい大会に出られる、やりたいことをやれるということに対して、われわれが障壁になってはいけません。

——ナショナルチームのあり方も変わっていく可能性がありますか。

これまで国際大会には、

JBCのナショナルチームのなかから選抜して派遣するという感じでした。野球でもサッカーでも、日の丸を背負うことに誇りを持っていて、それぞれ自分のクラブでの活動があっても、日本代表に招集されれば喜んでかけつける。それが理想だと思います。

——団体の枠にとらわれないで選考するということですか。

これはあくまでも構想段階ですが、JBCのナショナルチームだけでなく、プロはもちろん、NBFの選手も含め、本当にそのときいちばん強い選手を選抜してドリームチームとして世界で戦うべきだと思います。業



▲チームフェスティバルの第2回大会が、2月24・25の両日、群馬・ドリームスタジアム太田で開催されるが、参加チーム募集から数日で定員に達する人気ぶりだった。写真は昨年の第1回大会(3月11・12日/神戸六甲ボウル)の様相

界全体でチームジャパンを応援するという形になった方が、盛り上がるし選手のモチベーションも上がると思います。



▲4月から使用されるロゴ

——少子化、人口減少の時代にいかに子供たちにボウリングをアピールしていきますか。

野球やサッカーを含め、全競技団体が抱える悩みだと思います。一つわれわれに追い風になりそうなのが、中学校の部活動を地域のクラブ活動に移行しようという動きです。もともとボウリングは学校のクラブ活動で完結してなくて、やりたい子はJBCの県連やボウリング場のジュニアクラブに入るなりしてやってきている。その意味で他の部活に比べて一歩も二歩も先んじている。そこを生かして各ボウリング場とも協力しながら、ボウリングをやる子を増やしていきたい。

——2024年はある意味節目の年になりそうですね。

役員や職員ともいつも話をしているんですが、どんどん新しいことに挑戦しなければ変わっていかない。やってダメならまた違うことをやってみればいいんです。10年、20年、30年後のボウリング界が元気になれるようにというのが、われわれの役割だと思っています。その覚悟も込めた今回の名称変更でもあります。

競技ボウラーだけでなくすべてのボウラーの受け皿に

——新年度から団体名称が変更されます。このタイミングで変える意図はなんですか。

当協会がこれまで培ってきたものを大切にすることはもちろんですが、同時に今のままではいけないという危機感がありました。2024年はJBCの創立60周年の年でもあります。新しい時代に向けて、変革のいい機会かなと思います。

——どのように変革されていくのでしょうか。

これまで競技者の団体として、スポーツボウリングの普及に努めてきました。これからは競技ボウラーと愛好者ボウラーの2カテゴリー、スポーツボウリングと楽しむボウリングの両輪でやっていきたいと思っています。すべての人を対象にボウリングの普及を図っていく、その思いも込めて、JAPAN BOWLINGというような、大きな名称にしました。——昨年誕生したチームフェスティバルは、これまでのJBC

にはなかったコンセプトの大会でしたが、あれもその一環でしょうか。

そうですね、まさにあの大会は、だれでも参加できる大会として企画しました。2月に開催する今年の大会では、JBC対NBFのエキシビジョンマッチも予定しています。

——これからは、従来の選手権のような競技者のため以外の大会も増やしていくのでしょうか。

今企画しているのは、健康ボウラーの全国大会です。近年、ほとんどのボウリング場で健康ボウリング教室をやっていて、教室を卒業した人たちが継続してリーグを楽しんでおられる。その人たちを対象に、スポーツツーリズムじゃないですけど、旅行とボウリングを兼ねた全国大会を、10月にテスト大会としてやりたいと思っています。ボウリング場協会さんや全国のボウリング場にも協力を仰ぎながら、みんなで一緒に作り、盛り上げていけたらなと思っています。

——両輪のうちのスポーツボ

WORLD TOPICS Vol.11 report 山下 知且

1月14日から17日まで、カンボジアの首都プノンペンに行ってきました。過ごしやすい気候に温かい人々、日本製の信号機…、初めて訪れましたが、どこか懐かしいような、とても居心地のいいところでした。

さて渡航の目的はというと、パラボウリングの会議があって、一般社団法人全日本視覚障害者ボウリング協会(BBCJ)青松利明会長の代理として出席しました。

パラボウリングは、令和に入ってから国際ボウリング連盟

(IBF)の中にパラ部門ができ、そしてアジアにおいては、昨年ABFが初めてアジアパラボウリング選手権大会を開催するまで、IBFやABFとは別の組織体で運営をしていました。BBCJ青松利明会長は、国際視覚障害者スポーツ連盟(IBSA)ボウリング部門の前会長を務めるなど、まさにその中心として世界中のパラボウリングの発展に貢献されています。

今まで運営を頑張ってきたその組織体の一部は、IBFやABFが急にパラ部門を立ち上げたことに、正直あまりいい印象を持っていなかったこともあり、私はどちらにも関わっているものとして、IBFやABFがパラ部門を立ち上げた当初から、両者の間のさまざまな調整

に注力しています。

会議では、今後のパラボウリングの行事予定が大まかに決まりました。今年6月にはプノンペンにて、第1回カンボジアパラボウリングオープン(仮称)が開催されます。そのプノンペンのボウリング場を運営しているのは、元シンガポール代表選手で、経営・運営者として東南アジアの多くのボウリング場の発展に貢献しているレオン・リム氏。とても素敵なボウリング場の雰囲気息をのみました。

またそのボウリング場では、8月に第1回カンボジアオープンが開催されます。皆さんも海



▲6月の第1回パラボウリングオープンの会場となるレオン・リムさんのセンター

外のオープン大会に参加してみたいかですか。



やました・ともかず 1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年～2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。



▲会議では今後の行事予定が話し合われた